

人と社会を見つめ，自らの人生を歩む：まちづくりで学び，働き，研究する

著者	古橋 敬一
雑誌名	名古屋学院大学論集 社会科学篇
巻	56
号	3
ページ	35-42
発行年	2020-01-31
URL	http://doi.org/10.15012/00001203

〔特集〕

人と社会を見つめ，自らの人生を歩む

——まちづくりで学び，働き，研究する——

古 橋 敬 一

港まちづくり協議会

要 旨

これからの人生をどんなふうに通いて生きていくのか。それは、学生時代から今も抱き続けている問である。ここでは、十名教授が実践されてきた「働・学・研」融合の理念と試みを私なりに紐解き、そこから得た視点に基づいて、自らの拙い実践を振り返る。「働きつつ学ぶ」を越えて「研究する」ことを継続的に実践していくことが、現場ではどれほど大変なことか。その困難に直面しながらも、いただいた機会を活かすべく最善を尽くし、実践の今を素描する。

キーワード：まちづくり，資本論，タテ型社会，多様化，人と社会とその関係

Living in the present, between humans and society

—Working, learning and researching through community engagement

Keiichi FURUHASHI

Joint Committee of Port Town
Nagoya Gakuin University Doctor of Business Administration

1 はじめに

今から二十数年前、私は1年の浪人生活を経て名古屋学院大学の経済学部に入學した。受験には達成感も納得もなく、悶々とした大学生活の始まりだった。しかし、講義だけは真面目に出席していた。裕福な家庭でもなく、奨学金取得は必須だったからだ。

そんな頃、十名教授の「現代サラリーマン論」を知った。教師自らが「しがないサラリーマン」だったとし、反骨精神を抱いて社会人研究者としての歩みを続けてきたと告白する。その軌跡を客体化し、現代社会の知的労働者が抱える闇と光を縦横無尽に語る。その姿に惹かれ、何かを揺さぶられる思いがした。

講義を聴きながら、脳裏には小さな町工場で働く父の姿が浮かんでいた。父は、大学に行きたくても行けなかった境涯ながら、息子の進学を懸命に支援してくれた。至らない自分への恥ずかしさと腹立たしさ。にもかかわらず内奥から湧き出す知的好奇心。揺さぶられたのは、私の中の複雑なカタマリであった。

その後、私は縁あって愛知県瀬戸市中心市街地商店街でまちづくり活動に関わるようになり、その継続を意図して「まちづくり」を「地域経営学」というテーマにこじつけて大学院進学を志す。しかし当時、そのようなテーマのゼミはなく、手を差し伸べてくれたのが十名教授であった。

研究そっちのけで、まちづくり活動に没入し続けてきた私。そんな人間が学位を取得できたのは、何とか奇跡のような出来事で、全ては十名教授の指導とゼミ諸先輩および仲間達の支援の賜物である。改めて深く感謝する。

学生の心を揺さぶり、また院生の研究を献身的に支え、さらにはそれを自らの研究の糧とも

する。十名教授の働き方と生き方の実践こそが、「働・学・研」の融合¹⁾そのものである。以下では、そんな十名教授の視座に学び、自らの仕事と研究、人生についても考察を試みる。

2 「働きつつ学び研究する」を解く

2.1 「働・学・研」融合の思想的背景

「働・学・研」の思想的背景として、十名[2010]には『資本論』第1巻[1867]への言及がある²⁾。『資本論』はいわずと知れた経済学の古典であるが、そもそも十名教授の「働・学・研」の実践は、若き時代に企業人として働きながら、この名著との格闘に始まる。

資本の拡大再生産による人間性の搾取、社会環境の破壊。マルクスは、現代にも通じるこれらの課題を乗り越えるために「労働と教育を結びつけた大工業システム」を提示し、「全面的に発達した人間を生み出す」ことの重要性を説く。十名[2010]は、それを「働・学」融合のダイナミズムと把握しつつ、しかしそれが、資本主義を促進させ、知識社会を成立させた一方で、より複雑化し群をなす社会問題が連鎖的かつ同時多発的に発生する混沌極まる状況を生み出したと指摘した。そして、それに対応するために、各産業、地域、職場における創意的な取り組み、つまり、「働きつつ学ぶ」にとどまらない「働・学・研」融合が求められていると喝破した。そこには、古典への創造的解釈とそれをも凌駕しようとする建設的な批評性がある。

また十名[2010]では、『資本論』を、19世紀半ばにおける絶頂期のイギリス社会のタブー、すなわちそれを支えた労働環境の劣悪さ、苛烈を極めた抑圧と貧困の実態を告発する書と位置付けた。また、その現実を直視し、且つそれを越えようとする人間発達と社会変革のダイ

ナミズムを説いた古典として評価した。

タブー、闇、或いは聖域と表現される領域に勇敢に介入し、ただ批判するのではなく、その現実を表裏一体のシステムとして把握しようとする。そして、その構造的な課題を指摘した上で、そこに新たな可能性を見出そうと試みる。そうしたシステムアプローチは、企業不正の闇に鋭くメスを入れた最新の研究においても引き継がれており、十名教授の研究の通奏低音として響きわたる³⁾。

2.2 「働・学・研」融合の真骨頂は実践に

十名教授が提唱する「働・学・研」融合の真骨頂は、現場の課題に向き合う実践にある。終身雇用と年功序列の神話は崩壊し、現代は新たなシステムを模索中である。生涯を一つの会社に捧げるような生き方や働き方は通用しなくなり、労働者の中にはキャリアデザインへの希求も高まりつつある。働き方改革とは、むしろそうした潮流を表面化させようとする後付けの政策とみる。しかし、それが改革と語られる所以は、現代社会の企業をはじめとした様々な働く現場に、そうした労働者たちの希求が反映されていないからでもある。日本社会では、会社や仕事に人生の大半の時間を割くことはまだまだ当たり前で、そこに逃れがたい様々な磁場が働く。

中根〔1967〕は、それを、タテ型社会の内部にはたらくダイナミズムと指摘したが、その場を拘束する磁場は、日本独特のもっとも変化しにくい社会構造から生まれる⁴⁾。その場には、それが学術研究であれ、個人に帰属する別価値を持ち込む際の暗黙の規範やルールが存在する。私にも、それを見誤り、博論研究を停滞させた苦い体験がある。

十名教授が、これまでの現場で向き合っ

られたことの本質は、日本の社会構造そのものとのせめぎあいともいえる。様々な場面で、折に触れて沸き立つ関係性を、単に煩わしいこととして断ち切らず、敢えて分け入り、向き合おうとする。それが、独創的な知見を切り開く。時にそれは、抑圧や苦境への遭遇にも繋がるが、その時こそ、新たな潜在能力を獲得する機会として、果敢に挑む。そうして自己を変革し、社会＝場を動かす。その挑戦の姿に、私は多くのことを学んでいる。

やはり、「働きつつ学ぶ」に加えて、「研究する」というアウトプットを積み上げること。その過程で「働・学」を省み、客観視することで、自らの強みを再認識して、独自性へと転換していくことが重要である。しかし、これらのセルフマネジメントとその実践は、本当に困難な作業であり、私個人としては、未だに状況が打開できないまま多くの課題を抱えている。

2.3 現代社会を生き抜くセオリーとして

私は、学位取得後から、名古屋学院大学、愛知淑徳大学、名古屋芸術大学などで、非常勤講師として、教壇に立たせていただいている。まちづくりの現場での実践を素材に、教えるというよりは、一緒にやってみる、共に考えるスタイルで、対話や議論を軸にした講義が主流である。

それらの講義の一つに、愛知淑徳大学の全学部共通科目「違いを生きるライフデザイン」というタイトルのリレー講義がある。私の担当は、「地域づくり」。その中で、「時代背景を読み解く」として、これからの人口減少社会について考える箇所がある。人生設計を描く際、自分の仕事を軸にしたキャリアをデザインしようにも、社会状況やニーズを前提条件としていかに把握するかが肝となる。しかし、社会規模の縮小、そ

れを埋めるための外国人労働者であるとか、高齢者の再雇用、AIといった新たな条件の乱立は、状況やニーズそのものを流動的にする。前提条件の素描はできても、それはすぐに変化してしまうのだ。現代の若者は自分探しだけでなく、社会の行方までをも探求せねばならないのだから大変である。

時代を読み解くためのキーワードに「多様性」がある。近年、地方創生に関連したテーマで全国の講演に招かれるという平田オリザ氏は、この「多様性」に注目し、しかもその本質を非常にわかりやすい言葉で紹介する。平田 [2012] は、現代のコミュニケーションは、「分かり合えないことから始めるより他ない」と指摘する⁵⁾。日本的な磁場の働く場においては、「分かり合える」ことが関係づくりの前提だった。しかし、人口減少社会の中では、「構成要員の多様化」が進み、日本独特の社会構造そのものが揺らぎ始めている。「構成要員の多様化」と述べたが、これを「多様化」と表現するためには、構成要員の中での対話を軸にしたコミュニケーションが基礎となる。多様性の実現には、積極的な関係づくりが欠かせない。関係性が築かれていない、雑多な人々の集合では、場にも混乱が生じやすい。或いは既に混乱を来たしているのが現在の状況なのかもしれないが。

私は、上記のようなことを述べながら、学生達に問う。「現代のまちづくりは、人と社会とその関係性を再構築することと考えていますか、皆さんはどう思いますか?」と。

私が学生だった時代は、就職氷河期といえども、人口減少の想定は不都合な未来の1つで、経済成長社会のあるべき姿は、綻びはありつつもまだまだ健在だった。そして、教育にはそんな社会を支えていく人材を育てることが求められていた。今はどうか。流動する社会に対し、

教育現場にも、ビジョンそのものの再考が求められていると感じる。

地域づくりといっても、地域は既にそこある。敢えて地域づくりというのであれば、テーマはその質や在り方であり、マネジメントだろう。そして、この考え方は、「働・学・研」融合の視点と響き合う。

自らの実践を深め、創意的に捉え直すことは、自らが関わる仕事や地域にも同じである。人も社会も、どこかの誰かを目標にしてキャッチアップする時代ではない。重要なのは、関わっている仕事や地域の歴史、その意義や課題を客観的に振り返りつつ、深く内省を試みること。万事極めることの境地には共通項がある。現代では、情報のネットワーク化が急速に進んでいるが、それをいたずらに消費しても役には立たない。本当の意味での価値も創造されないだろう。情報を活用し、自らの体験や気づきを照射し、より深く研究することで、現状を打開する創造性が呼び覚まされる。

このように考えると「働・学・研」融合は、現代社会を生き抜く上でのセオリーとしても位置付けられる。しかし、「働・学・研」融合の真骨頂が実践にあることは既述した通り。以下では、私自身のケースで、この問題について引き続き考えてみたい。

3 まちづくりと「働・学・研」の融合

3.1 まちづくりの仕事と向き合いながら

愛知県名古屋市港区の西築地地区のまちづくり活動を推進する「港まちづくり協議会」で働いて、既に10年以上の歳月が流れた。世間を見渡せば、まちづくりの仕事は、まだまだ知られていない職業で、過渡期にある。そんな中で、自分で選んだ仕事を自分なりのやり方で続けて

こられた境遇に大変感謝している。

しかし、その10年も「働・学・研」融合の視点からすると、数々の課題がある。10年という歳月は過ぎてみれば光陰矢の如し。小さな達成は数あれど、全体として街がどう変わったのかを問われれば、まだまだ心もとない。地域の地盤沈下は、今や定番の問題であり、その勢いは加速するばかりだ。まちづくりの現場に立つ以上、その現実とどう向き合うのかが問われる。先に、「現代におけるまちづくりは、人と社会とのその関係性の再構築である」と述べた。この解釈には、私なりのまちづくりに対する問題意識が含まれている。戦後の高度経済成長期を経て日本社会が手に入れた「豊かさ」、それへの再考が始まって久しい。歴史的に見れば、まちづくりが注目されるようになったのもちょうどその頃からである。その後、バブル、長期不況、東日本大震災を始めとした大規模自然災害と人災の勃発が続いた。現代の政治経済の政策だけでは、これらの問題の解決は導かれそうにない。一方、これらは全て地域社会における具体的な問題として人々に経験されてきた。まちづくりが見据えなければならぬ地平は、極めて総合的で学際的である。現場に立ちながら、より広い視野を持ち自らが体験する現象の背景や本質を見極めて、有効な手を打っていくためにはどうすべきか。

また、この課題に向き合うために、まちづくりの仕事の業務量は、年々増加しており、地域における人間関係が濃密になる中で、断り切れない付き合いも増加傾向にある。それに大学の講義を掛け持つことで、結果的に週に1度の休みさえ取ることさえできなくなる時期もある。自由時間の消失は、仕事も研究も圧迫してしまい、健全とはいえない状況を招く。自分の問題意識と深く関わり、またやりがいのある仕事な

だけに、つい制限を超えてのめり込んでしまう傾向から中々抜け出せない。

「働きつつ学び研究する」のバランスをどう定義するのかが問われている。「働きつつ学ぶ」という循環的なプロセスを、フローの次元とするならば、その折々で深く掘り下げ、理論化・定式化して普遍を求めるストック化の次元が「研究」であり、その一つが「論文」である。そのように定義すれば、私には論文としてアウトプットすることが圧倒的に足りていない。反省しきりである。

まちづくりに真摯に挑もうとすれば、「働きつつ学ぶ」は当然の行為である。今、振り返れば、私はそれに意欲的に取り組み、それなりの困難も乗り越えてきた。そこには意義もやりがいもあった。しかし、私はそのフローをストックへ結び付けることができなかった。言い訳はいくらでもあるが、「Publish or perish!」で、それが現実なことに変わりはない。私の人生に「研究」を取り入れて、「働・学・研」融合のダイナミズムを巻き起こすことができるのか。今こそ真価が問われている。

3.2 「なごやのみ(ん) かとまち」をつくる

私のまちづくりの現場は、名古屋の港まちである。1907年に開港した名古屋港が生み出す仕事を求めて集まった人々によって築かれた街区で、その当時は、大変なにぎわいを誇った街だった。数々の港湾関連の会社があり、そこで働くたくさんの労働者とその家族、日雇い人夫、貿易関係者と外国人船員も多い街で、その全ての人々を支えるたくさんの飲食店、日用雑貨や土産屋などが繁盛し、大変な活気だった。しかし、船舶の大型化、港湾業務の機械化等で、港の機能が移転して以降は、街の衰退化が激しくなった。「働く港から市民に親しまれる港へ」

の転換からて久しいが、観光客が街の先端である名古屋港エリアを訪れることはあっても、街区に流れることはない。しかし、現在も、産業、商業、住宅、観光施設までが混在するバラエティーに富んだ街並みは、名古屋の港まちに独特の風景を漂わせている。

港まちづくり協議会が、そんな名古屋の「みなとまち」に「ん」を入れて「み（ん）なとまち」というキャッチフレーズを使った活動プロモーションを始めたのは、2011年頃のこと。そのコンセプトは、「名古屋中のみんなと楽しめて、全国の皆さんに誇れる『みんなの港まち』を目指す」ことである。現在では、これを軸として中長期計画としてのビジョンを描き、「暮らす、集う、創る」をテーマにした防災、子育て、コミュニティガーデン、にぎわいイベントやアートプログラムなど多彩な事業を展開している。

3.3 実践の中から問いを立てる

「研究」へと踏み込むには、実践の中で、どのような問いを立てるのがキーになる。しかし、その最中は、スピードも重視されるため、思考の逡巡や議論への時間の中々見出せない。いつの間にか、大切な気づきも彼方へと過ぎ去っていく。その断片を掴み、具体的な問題意識に昇華させる創意工夫が求められる。

私には幸いにも博論研究があったため、実践の最中で浮かんだ「まちづくりとは何か」という根本的な問いかけと向き合うことができた。まちづくりとは何かを巡る数々の文献を自らの実践感覚に浸して必死で読み解いた。それは非常に意義深い探究であった。やがて、私はそこから、まちづくりを「時代の要請を呑み込みながら変容していく社会構想を表現するためのコンセプト」として理解した。つまり、「まちづ

くりとは何か」を考えることは、その時代を読み解く行為であり、それに対して自分たちには何ができるかを考えて行動していくことに繋がる。その意味で「まちづくりとは何か」という問いは、まちづくりに関わる上で、一生続くものであると考えるようになった。

現在の私は、まちづくりの仮説的解釈を「人と社会とその関係性の再構築である」と掲げている。実践体験をベースに暗黙知を練り上げ、形式知として表出する。この仮説的解釈も一つの形式知である。

そしてさらに、今度はそれを自分の仕事であるまちづくりの中で捉え直すと、様々な課題が浮かび上がってくる。現在の名古屋の港まちに、当時の繁栄は見る影もない。25周年が過ぎた名古屋港水族館には、近年も多くの来場者が訪れているが、商店街では、要の商業施設が撤退し、商店街が始まって以来の最大の苦境を迎えている。商業の活性化は、目に見える緊急テーマの一つといえる。街の人からは、「街が日に日に壊れていく、あなたの仕事は『まちづくり』でしょ。街を作りなさいよ」と辛辣に諷められる。その気持ちは痛い程に伝わってくる。また私の立場としては、それに向き合わざるを得ないし誠意を尽くしたい。

しかし、一方でより深いところでの私の問題意識は、「人と社会とその関係性の再構築」にある。商業が苦しくなる直接の原因は複合的であり、そのどれか一つを解決しても堂々巡りからは抜けられない。それはそれとして突破口を探りながらも、より本質的には、社会関係資本が崩壊しつつある状況に対しても、なんらかのアプローチを図らねばならない。そして、もちろんそれにしても全方位的な事はできない。限界もあり、その制約の中では、選択を迫られる。

そんな中、現在の私は、人間の創造性を活力

として活動を展開する文化芸術を活用したまちづくりに大きな可能性を感じている。

4 アーカイブを軸にした取り組み

4.1 街の人の記憶を創造的に記録する

2015年、港まちづくり協議会では、街の人々への聞き書きを中心としたアーカイブプロジェクトをスタートさせた。この取り組みの背景には、港まちでのアートプログラムとの出会いがある。しかし、ここではそれを割愛し具体的な事例を述べる。

アーカイブプロジェクトでは、地域の方々に直接会い、その時々テーマをきっかけに人生にまつわる様々なお話を伺っている。それは、2015年の同エリアの西築地小学校開校100周年を、港まちの100周年と捉え直すことをきっかけに始動し、人々の記憶を聞き書きし、その成果を発表する展覧会を毎年1回開催するというサイクルでやってきた継続型のプロジェクトである。

参考にした取り組みは数多いが、地域を歩き、そこに暮らす人々の声を聞き、まとめたものの中から、地域再生の手がかりを発見し、街の人々や地域の潜在能力を引き出しながら、地域おこしを展開した民俗学者、宮本常一氏の実践に大きな影響を受け、宮本氏に学んだ経験のある香月洋一郎氏にも直接アドバイスをいただいている。

聞き書きを通して街の人々の声を集積させ、現在の港まちのもう一つの姿を描くことができないか。それは、今とこれからの街の姿を考えていく際の大切な写し鏡となる。シビックブランド、或いは、街のアイデンティティを豊かにするための文化アプローチである。

地域の中で暮らす人、働く人、関わる人に出

会い、その一人ひとりに大切な人生の話を聞く、それをまとめ、文章として集積させながら、街の中であって、しかし見えてはいなかった数々の物語が浮かび上がってきた。その豊かさに驚きを感じると共に、この街の未来への可能性を感じる。これこそが、この街の活力の源泉であり、これを受け継ぐ者達をどう育てるのが、この街の未来を大きく左右すると考えている。

4.2 これからの課題

アーカイブプロジェクトは、地域に生きる人々の根源的な活力を引き出す可能性があると思察されるが、地域の商業的活性化には、今のところ、直接的には結びついていない。

無論、商業的活性化だけにこだわるわけではないが、このアーカイブプロジェクトを土台にしながらも、目に見える形での街の活性化にも貢献することが課題の一つ目である。

また、そのプロセスや具体的な手法を客観的にまとめることができれば、他の地域にも参考になる事例にできるだろう。公金を活用する社会実験としては、やはりそこを目指したい。

文化芸術の力を活用するといっても、アートイベントを開催して観光客を集めるという類のことではなく、その力で、人と社会の関係性を再構築することを目指したい。

5 おわりに

資本主義社会の日本の中で、私たちは今日を働いて生きている。長い不況が続き、地方創生が叫ばれる中で、全国で様々なまちづくりが取り組まれている。確かに多少は景気も回復したのかもしれない。しかし、それよりもはるか以前の70年代より、「豊かさとは何か」の問い直しは始まっている。今さら経済的活性化だけが、

まちづくりの本分ではないだろう。

より深い視点で社会現象を理解し、より具体的な方法で人に地域に関わっていきたいと思う。本当の意味で人に喜ばれ、人を元気にし、その結果として、地域そのものが活力を取り戻していくようなアプローチを選びたい。そのため、「働きつつ学ぶ」だけでなく、「研究する」を組み込んだ実践の継続こそが求められる。

社会に学び、自らを知る。また、自らの人生に起きる出来事を探求し、社会構造を理解する。人と社会の変革の糸口をリアルな事象の中に探ろうとする私の思考は、十名教授より授かったものである。これからも、この授かりものを大切にして、研鑽を重ねて参りたい。十名教授のこれまでの薫陶に心より感謝します。

注

- 1) 十名教授の最新の研究では、「融合」は「協同」へと見直されている。飽くなき探求は現在進行

形であるが、本稿においては、これまでの十名教授の研究を踏まえることに重心をおき、従来の「融合」を採用した。

- 2) 十名直喜 [2012] 『ひと・まち・ものづくり経済学—現代産業論の新地平』法律文化社
- 3) 十名直喜 [2019] 『企業不祥事と日本経営—品質と働き方のダイナミズム』晃洋書房
- 4) 中根千枝 [1967] 『タテ社会の人間関係』講談社
- 5) 平田オリザ [2012] 『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社

主要業績

- 古橋敬一 [2012] 「地域創造の視点と実践」名古屋学院大学 (博士論文)
- 古橋敬一 [2015] 「持続可能なまちづくり」『地域創生の産業システム』第9章 水曜社
- 古橋敬一 [2018] 「地域創造実践論の構築を目指して」『名古屋学院大学 大学院経済経営論集 第21号』名古屋学院大学